

デンテラ

年の瀬の選挙も終わり、第2次安倍内閣が誕生しました。今回の選挙の争点の一つは、世代間の給付と負担のバランスをどうとるかという事であったと思います。税と医療・福祉の一体改革の議論も、まさに世代間の負担のアンバランスをどう調整するかという事でもあります。

医療や福祉の予算が年々膨らみ、しかも、今後高齢化が一層進む中で、このままでは国家財政が破綻しかねないというのは、誰しもが認識している事です。消費税の引き上げに対して反対の声が沸騰しなかったのは、国家財政に対する国民の危機感の表れともいえるでしょう。

さて、世代間の給付と負担の問題に関してよくいわれる事は、今は高齢者1人を3人の現役世代で支えているが、今後、高齢者1人を1人の現役世代が支える肩車型社会が到来するというものです。

年金にしても医療にしても、今は高齢者が大事にされ過ぎで、現役世代は負担の割には子育て支援を含め給付が少ない。もっと若い世代の為に金を使うべきであり、高齢者はもっと負担すべきという声が大きくなって来ています。このまま放置すれば、世代間の争いに発展するかも知れません。

既に、経済的理由だけでなく、核家族化も進む中で、親の面倒を見きれず、親の扶養を放棄してしまう現役世代も少なくありません。行き場を失った高齢者の孤独死は、珍しい事ではありませんし、もっと悲劇的なのは、親の死を隠して、親の年金で生活していたという事件さえ起こっています。

親の扶養を放棄し、関係を絶ってしまう、これは現代版「姥捨て」といえなくもありません。

「姥捨て」すなわち「棄老」というのは、かつて日本が非常に貧しかった頃、全国各地で行われていたと思われまます。

親を捨てるというのは誠に不道徳だと思いますし、お年寄りは今まで苦勞して働いてきたのだから、働けなくなったらみんなで面倒を見るべきだというのは、勿論まっとうな考え方です。しかし、村に食料が無くなれば、口減らしをせざるを得ない。結局、生産力のない年寄りを排除しなければ皆が共倒れになる。「姥捨て」は、そうした家族の共倒れを避けるための究極の手段だったのだと思います。

柳田国男の手になる「遠野物語」の111段には「姥捨て」の話が、かなりリア

リティを以て描かれています。

「山口、飯豊、附馬牛（中略）ならびに土淵村の字土淵に、ともにダンノハナという地名あり。その近傍にこれと相對して必ず蓮台野という地あり。昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野へ追い遣るの習いありき。」

この中に記されている「蓮台野」は、遠野地方では「デンデラ野」と呼ばれているようで（三浦佑之、赤坂憲雄著「遠野物語へようこそ」から）、この「デンデラ」こそ「姥捨て山」そのものという事になります。

「姥捨て」といえば、深沢七郎の「樞山節考」という作品が有名であり、読まれた方も多いと思いますが、「姥捨て」のイメージはこの「樞山節考」によって出来上がっているといっても良いでしょう。

「樞山節考」という作品は、「棄老」伝説をベースに、「おりん」という老婆が自ら進んで「姥捨て山」に捨てられるというお話です。

「おりん」は、村には食料がない事を知っており、自ら進んで山に捨てられようとするのですが、皆が皆そうとは限りません。「樞山節考」の中には、助けてくれるよう哀願しながら息子に崖下に突き落とされてしまう「又やん」という老人の話が出て来ます。そうした、悲惨な現実には沢山あったに違いないと思います。

「おりん」が息子に背負われて山に捨てられるという日に雪が降って来ます。岩陰に下された「おりん」は、「背から頭に筵(むしろ)を負うようにして雪を防いでいるが、前髪にも、胸にも、膝にも雪が積もっていて、白狐の様に一点を見つめながら念仏を称えていた（「樞山節考」から）。」物凄い情景ですね。

それでは、山に捨てられた老人たちはどうしたのでしょうか。ただ、打ち捨てられて「野ざらし」となるばかりだったのでしょか。

前述の「遠野物語」には続きが有って、「老人はいたずらに死んでしまうこともならぬゆえに、日中は里へ下り農作して口を糊(ぬら)したり。そのために今も山口土淵辺にては朝に野らに出づるをハカダチといい、夕方野らより変えることをハカアガリというといえり。」と記されています。つまり、老人たちは、山に捨てられる事で里での生活とは一線を画しながら、しかし、強かに生き延びようとしていたことが伺われます。村田喜代子著「蕨野行」や佐藤友哉著「デンデラ」は、それぞれ物語の趣は全く異なりますが、捨てられた老人たちの、悲惨なだけではないパワーみたいなものを感じさせます。

今は、「デンデラ」は特別の場所ではありません。老人が、随分以前に亡くなっており、遺体が白骨化した状況で発見されたという話しを耳にすると、自分達の日々の暮らしの中にも「デンデラ」が潜んでいると感じざるを得ません。ただ、はっきりしている事は、「デンデラ」に出てくる老婆たちの様に、怒りであろうと生への執着であろうと、生きる為の戦いを止めてはいけないという事です。

「遠野物語」を書いた柳田国男が亡くなって50年になります。彼は、一体どのような思いで今の世を見ているのでしょうか？（塾頭：吉田 洋一）